



Title	仏領海外県マルチニック & ブラジル出張報告記
Author(s)	大平, 具彦
Citation	国際広報メディアジャーナル, 2, 245-255
Issue Date	2004
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/446 ; http://www.hokudai.ac.jp/lang/imc/imc-j/imc-j-2/imcj2.html ; http://www.hokudai.ac.jp/lang/imc/imc-j/imc-j-2/ohira.pdf
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	article (author version)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	imcj_2.pdf



[Instructions for use](#)

研究報告

仏領海外県マルチニック & ブラジル出張報告記

大平 具彦

Report on the Field Trip to Martinique (French
overseas prefecture) and Brazil

OHIRA Tomohiko

This report is the resume of interviews held with Martinican and Brazilian writers, critics and researchers in August 2003, about Martinican grand poet Aimé Césaire and his cultural concept, Brazilian original writer Oswald de Andrade and his inter-cultural ideas.

This report will be intergrated into the book (in preparation) on the theme of Trans-Culture, Surrealism and Primitive Art.

メキシコのユカタン半島から、キューバを含む大アンティル諸島へと伸び、そして美しい弧を描いて並ぶ小アンティル諸島を経つつ南米大陸へと繋がって、あの細長いパナマ地峡へと展開してゆく一連の陸地群に囲まれた海、カリブ海。そしてその小アンティル諸島の中であって、かつてそこに住んでいたカリブ人によって「花咲く島」と呼ばれていた島、マルチニック。面積は沖縄本島ほど、人口約 37 万を数えるこの島は、現在はフランスの海外県で、熱帯の風土の中には言語をはじめとしてフランスが深く沁み込んでいる。

こう書けばいかにも楽園を感じさせる風情ではあるが、しかし実はこのカリブ海地域こそ、コロンブスのアメリカ発見によって始まった近代の歴史上最も苛酷なドラマが展開した地域だった。それは、何よりもこの地域に住んでいたカリブ人が、新大陸の富を貪婪に求めて襲来したヨーロッパ人の攻撃の前に必死の抵抗も空しく虐殺され、絶滅してしまったことによって端的に示される。こうしてマルチニックは 17 世紀にフランスの支配化に入るのだが、ドラマの第二幕はさらに凄まじいものだった。知恵の回るヨーロッパは、この地域での砂糖のプランテーション農業の労働力として、絶滅した先住民の代わりにアフリカから大量に奴隷を輸入するシステムを作り上げる。それがかの悪名高き三角貿易である。

17 世紀以降、英仏が主力となって行なわれたこの貿易システムとは、先ずヨーロッパから安価な加工品物資をアフリカ大西洋岸に運んで奴隷と交換し、次に彼らをカリブ海に運搬してその黒人奴隷を代価に砂糖、タバコ、綿花、コーヒーなどの新大陸特産物を購入し、今度はそれら新商品を再びヨーロッパに運んで売りさばくのである。実に巧妙なこの奴隷貿易はヨーロッパの富の蓄積にとって魔法の杖であった。この資本蓄積があが産業革命を推し進めた動力のひとつであったとさえ言われている。一方、アフリカからカリブ海に向かう船舶に、鎖に繋がれてぎゅう詰め積み込まれた黒人らは、強烈に照りつける太陽のもと、ろくな食料も与えられず、ひどい衛生状態の中でその多くは死んでゆき、もはや奴隷とすらなり得ないその遺骸は、ただの汚物として海に投げ捨てられたという。

しかし歴史は最も苛酷な運命を生きた場が新たな軸となって展開してゆく。1931 年、そのマルチニックでフランス語による教育を受けた一人の秀逸な黒人青年（つまりはかつてアフリカから連れて来られた黒人の子孫）エメ・セゼールが留学のため宗主国フランスの土を踏む。折しもこの年パリでは「国際植民地博覧会」が開催され、フランスが誇るインドシナ、アフリカなどの植民地からの産物や文物が盛大に展示されていた。パリの名門高校、そしてフランスの知的超エリートしか入学できないエコール・ノルマル・シュペリール（高等師範学校）の学生となったセゼールは、砂漠が水を吸い込むように、フランスの文学、文化、そしてヨーロッパの文化を深く吸収していった。しかしフランス本国では、植民地からやって来た黒人は、いかに優秀であれ（むしろそうであれば一層）否応なく自身の出自とアイデンティティーの問題に突き当たる。自らの根から切り離

され、白い肌の人間の文化を崇めて、フランス語を通して（セゼールのフランス語能力は本国の知識人層も愕然とするほど卓越したものだ）ひたすらフランス人になろうとしてきた自分とは一体何者なのか。しかも遠い祖先の時代から言語を絶する虐待を受け、そして今もなお虐げられ続けているわが同胞たち。こうしてセゼールはサンゴール、ダマスらの黒人仲間と『黒人学生』誌を刊行し、黒人であることの存在価値を主張する「ネグリチュード」という思想を提唱する。1939年に、後に有名となる詩集『帰郷ノート』をパリで刊行後、故郷のマルチニックに帰って高等学校の教師となり、思想や文学の領域で後に世界的にも著名となる次世代の青年を多く育てた（フランツ・ファノンやエドゥアール・グリッサンは彼の生徒である）。その一方で同僚のルネ・メニルと新たに雑誌『熱帯』を出し、詩やエッセイを通して、ネグリチュードを掲げつつヨーロッパだけに還元されるのではない世界像を追い求めていった。

今から考えれば、1930年代のこのセゼールの活動が、現代へと繋がる歴史の展開軸のひとつであったように思う。決定的であったのは1941年にシュルレアリスム運動の盟主アンドレ・ブルトンと出会ったことだった。ブルトンは、第二次大戦を逃れアメリカに亡命するためニューヨークに向かう途上で、戦時体制による事情でこの島に寄港させられたのである。二人は詩の表現においても思想の上でも共鳴し合い、ブルトンはセゼールと彼の記念碑的著作『帰郷ノート』を、ニューヨークで刊行されていた雑誌で序文とともに紹介し、セゼールの名を世界に知らしめた。セゼールはその後政治の世界に転進し、マルチニックの首都フォール・ド・フランスの市長とマルチニック選出のフランス国会議員を約50年にわたって務めることになるが、クレオール思想のマニフェストとなった『クレオール礼賛』の中で著者たち（ベルナベ、シャモワゾー、コンフィアン）が「我々は永遠にエメ・セゼールの息子である」(1)と書いているように、マルチニック出身の詩人や作家たちによって生み出され、現在世界的に注目されているクレオールという思想も、実は、これまで述べてきたようなセゼールの活動とそれを取り巻く文化史的コンテクストがあってはじめて形成されてきたものなのである。

では、セゼールの詩的思想的営みにおいて、果たしてシュルレアリスムはどのような作用をもたらしたのか、それは彼の「ネグリチュード」とどう交叉しているのか、一方「ネグリチュード」については、自らを専らアフリカや黒人の本源的固有性として語ってしまう本質主義的傾向がしばしば指摘されてきたが、それを批判的に乗り越えるものとして生まれてきたクレオールは、こうした流れの中でどう位置づけられるのか、またアメリカの文化人類学者ジェームズ・クリフォードは見事なセゼール論の中で、「われわれはいまや誰もが都会という群島に暮らすカリブ人である」と書いているが(2)、これはどう理解すべきなのか。こうしたテーマを中心に、現地のセゼール研究者、詩人やアーティストとインタビュー面談をすべく（昨年メキシコ研究出張と同じく、科研費による研究「20世紀多元文

化形成とシュルレアリスム　オセアニア、メキシコ、カリブ海を中心に」の一環として)行なったのが、今回のマルチニック出張である。セゼール本人との会見は、高齢でもあり(82歳)無理だろうと思っていたが、後述するように、マルチニック現地友人(グーダン=テビア氏)の厚意あるアレンジメントのお蔭で幸いにも実現することができた。

さて、もう一方のブラジルである。ブルトンがアメリカに亡命する船旅の途上で、たまたまマルチニックに寄ることになったことは先に述べたが、その航海の船に、アメリカを経てブラジルに向かう後の『悲しき熱帯』の著者レヴィ=ストロースが同船していたことはよく知られている。全く偶発的としか思われぬ両者のこの同乗だが、しかし後の文化史的経緯から見ると、ここには一見したところか細いながらも、実に意味深い歴史の糸が深く縫い込まれているように思う。フランスからマルチニックそしてブラジルと繋がるこの糸には、シュルレアリスムそして文化人類学というヨーロッパの知が、真正な意味において、まさしく「他者」と向き合う契機が内在していたのであるから。

ブラジルは、コロンブスのアメリカ発見後10年足らずの1500年にポルトガル人カブラルによって発見されている。当初ポルトガル本国は、望んでいた金銀がさっぱり見つからず、「パウ・ブラジル」という紅色染料用の木しか採れない(「ブラジル」とい国名は実はこの木に由来する)(3)この地にはあまり関心は示さなかったのだが、しかし広大な大地を領有するという帝國的野心がやはり優って、その後長きにわたる植民地化が開始された。イエズス会が核となって行なわれたこの拓殖事業の先陣を担ったのが、本国から呼び寄せた囚人、浮浪者、娼婦(もちろん子供を産ませるためである)らであったというのは、歴史の裏面をまざまざと見る思いがする。その後砂糖のプランテーション栽培や金の採掘が始まってからは、原住民インディオは華奢すぎて労働力には適さなかったため、カリブ海地域と同様にアフリカから「黒い象牙」(黒人奴隷)が大量に輸入された。18世紀に始まったコーヒー栽培も19世紀には本格化し、こうして、先住民、白人移民、黒人奴隷を基本人種構成として、ブラジルという南米の巨人が形成されていったのである。1936年にブラジルを訪れたドイツの著名な作家ツヴァイクは、その豊かな大地と資源、とりわけ人種問題が「混血」という形で乗り越えられ、ヨーロッパとは全く異なった多声的な文化が形づくられてゆくこの国に多大な関心を抱き(当時ヨーロッパでは人種を国家原理に掲げるナチスが猛威を振るっていたことを思い起こそう)、『未来の国ブラジル』という著書(4)を捧げている。

この新しい文化実験の国でも、当然ながら、20世紀前半にヨーロッパで展開したモダニズムや、ダダ・シュルレアリスムの影響のもとに、1920年代を中心に独特な形でブラジル・モデルニズモ運動が進行した。その中でも『食人雑誌(Reviata de Antropofagia)』というタイトルを持つ特異な雑誌(その中に有名な「食人宣言」が収められている)を刊行したオズワ

ルド・ジ・アンドラージには筆者は以前から関心を持っていたので、何しろ、ヨーロッパのカニバリズム(食人)的文化帝国主義を逆に「食って」しまおうというわけであるのだから、また、しばらく前に『ブラジル・モダニズムとアンチールのネグリチュード』(マリオ・ジ・アンドラージとエメ・セゼール)(5)という研究書も刊行され、ブラジルとアンチール(マルチニック)の関連も考える必要もあることから、今回の出張に(2003.7.25~8.16)ブラジルも加えることとした。

今回の出張の主な会見相手は以下の通りである(敬称略)。

(A) マルチニック

- ・エメ・セゼール (上述)
- ・ロジェ・トゥームソン アンチール・ギアナ大教授(比較総合フランス文学)、セゼール研究者
- ・セルジュ・グーダン=テピア 造形作家、詩人

(B) ブラジル

- ・オラシオ・コスタ サンパウロ大教授(ラテンアメリカ文学)、詩人、建築家
- ・クラウディオ・ウィレル 雑誌『Aguilha』主宰、詩人、批評家
- ・ガブリエル・ボルバ サンパウロ現代美術館主任研究員

以下、会見でのトピックを織り込みながら、シュルレアリスムとセゼール(マルチニック)、ヨーロッパ・モダニズムとオズワルド・ジ・アンドラージ(ブラジル)との交渉が現代の文化状況にもたらしてきた新しい風景を、スケッチ風に辿ってゆくことにしたい。

先ずセゼールとシュルレアリスムの結びつきをどう捉えるのだが、これは次のシャモワゾー、コンフィアンの言葉が適確に要約していよう。

セゼールは、数世紀にわたる奴隷制度と文化的疎外のために黒人の魂の奥底に埋められた、アフリカの力を解き放つことを望んでいる。ニグロは、科学への信仰で麻痺してしまった白人たちよりも大地に近く、石に、大河に、嵐により近くいる。セゼールはフランス語の内側からの革命を考えており、白人の言語の内部でニグロの言葉を語ろうとする。無意識の解放と自動記述を信奉するブルトンのような人物が、どうしてこれほど剛直に表明された信仰告白に心動かされずにいることがあるのか。シュルレアリストとは自分がなにかを知らないニグロなのだ。あるいは人間のうちに、あらゆる人間のうちに人びとが圧殺しようとしたニグロを目覚めさせるのだ。(6)

「ニグロ」という語が、前段から後段にかけて、奴隷として抑圧されてきた黒人から、近代ヨーロッパが20世紀に遭遇する人間意識の内なる無意識へと微妙に意味を変容させているのが、おわかりだろうか。そう、ニグロとは、ヨーロッパが未開として追いやってきた文化上の他者であると

もに、自らの意識の深層に閉じ込めてきた内なる他者（＝無意識）の謂なのだ。その意味では、無意識を人間の創造作用の源泉と捉えたシュルレアリスム（ブルトン）が、フランスの植民地マルチニックでそうした他者を一体的に体現してきたセゼールと出会ったのは、偶発的であるように見えて実はひとつの必然であった。

こうした事態はしかしすでに 20 世紀の当初から展開していた。現代絵画の原点を画すピカソの「アヴィニヨンの娘たち」(1907)は、アフリカの黒人彫刻からの直接的影響のもとで生まれており、また 20 世紀詩学の確立を示すアポリネールの詩集『アルコール』(1913)には、まさしく現代的な詩的イメージの先駆的表現である「太陽 首 切られて」という鮮烈な一行が記されていて(7)、これも黒人彫刻からのインスピレーションが原料となっている。興味深いのは、セゼールがこれと同一の表現をタイトルとした『太陽 首 切られて』という詩集(1948)を出していることである。会見で筆者がこの点について本人に尋ねたところ、それはまさしくアポリネールの一行に由来するとのことだった。このことが孕む意味は実に深いと言わなければならない。というのも、黒人アートから得た靈感で書かれたそのヨーロッパの詩的アヴァンギャルド表現が、今度はヨーロッパにとって他者であったその黒人側のセゼールの想像力に火をつけたのであるから。この一連の繋がりの中に、20 世紀的表象がまさにクレオール的に形成されてきたことのエッセンスが見えはしないだろうか。

会話の話題がランボーへと移る。ヨーロッパ近代の中で「他者」というトポスを先駆的に直覚し、それを強烈に生きたのがランボーだった。それは、「私とはひとつの他者なのです」という彼の有名な言葉(修辞学担当教師イザンバールに宛てた手紙の中にある一文で、当時彼は何とまだ 16 歳の高校生だった)に端的に示されているが、この言葉こそ、「私」というものの複数性、近代的自我が排除してきた自己の内にひそむ自己ならざるもの(＝他者、無意識、意識の未知の大陸)の認知宣言であり、デカルト的世界像からの一大転換を記すものだった。しかもランボーは別の箇所「俺はニグロだ」(8)と書いているのである。図式化して言えば、つまりここでも、「他者＝ニグロ＝無意識」が成り立つわけだ。セゼールもまさにその通りであると言う。彼によれば「創造作用とは人間の最も深いところにあるものの開花」であり、ネグリチュードこそその表現にほかならなかったのだ。

では彼の言う「人間の最も深いところにあるものの開花」とは、どのような創造作用として現われるのだろうか。セゼールの言語表現はフランス語でなされているが、シュルレアリスムの現代的擁護者アニー・ルブランによれば、それは、主知的な構造をもつフランス語の統辞法、語法、語彙が、ある根源的な力(セゼールの言う「人間の最も深いところにあるもの」)によって摂取され、組み直されてゆく一種の「カニバリズム」的プロセスであるという(9)。この指摘は(後述するオズワルド・ジ・アンドラージの「食人宣言」と並んで)、「文明」の名において「未開」なる世界を席卷し

てきたヨーロッパ文明が、別の文化的な力によって逆に組み換えられてゆくプロセスが形成されたことを鋭く見て取っており、実に意味深いものである。セゼールは、筆者のこうした説明に、年輪が深く刻まれた優しい微笑を返してよこしたが、おそらくは同意のしるしだったのである。

セゼール関連の著書もいくつもあるロジェ・トゥームソン氏によれば、セゼールとともに「<世界>の全体的理解」を可能とする理論的探究が始まるという。確かにそうだろう。何しろそれまで世界はヨーロッパとそうでない地域に分けられ、後者は専ら前者の所有物であったのだから。そして、ピカソへのアフリカン・アートの影響がそうした関係の切り直しの端緒だとしてすれば、マルチニック（セゼール）というインターフェースにおいて双方は接合し、新しい血の相互還流が始まったのだから。氏によれば、しかしその後の理論形成においては、セゼールの思考が詩人的直観に基づいていたのに対し、同じ詩人ではあっても哲学を幅広く研究したグリッサン（『全-世界論』という著書がある）の働きが大きいという。これも充分納得のゆく指摘である。

グリッサンの名が出たので、セゼールとその後裔者であるクレオール思想との関連について意見を求めると、コンフィアンらクレオール思想の旗手たちとセゼールの関係は、独立でなくフランスの海外県化を選択したセゼールの政治的立場との対立も絡んで複雑である、セゼールとクレオール派の対立は、世代の相違から来る歴史的文化的な文脈の差異が要因となっているとのこと、ただし問題はクレオリテ自体ではなく、これまでの歴史が何であり、これからどういう世界がつくられてゆくべきかを問うことだろうという答が返ってきた。セゼール研究者であるだけにクレオール派とは一線を画しているだろうと思われるトゥームソンとしては、当然の見解かも知れない。

しかしトゥームソンもまたマルチニック的思想の体現者であると思ったのは、マルチニックにとってアフリカとはどのようなものとして意識されているかという質問に対し、もはやその言語も生まれた土地も知らないのだからそれはすでに起源ではなく、起源すなわちアイデンティティーとは探究され、構成されてゆく何かである、という返事がなされた時だった。この見解は、文化はもはやある土地に固有なものである以上に、何かと接合しつつ構成されてゆくものであるというクリフォード的考え通じるものである。「われわれはいまや誰もが都会という群島に暮らすカリブ人である」というクリフォードの言葉を伝えたところ、その通りであり、人間には起源もアイデンティティーもあらかじめあるのでなく、どこか別のところへ向かうことが人間のありようなのだ、というこれまた実に明晰な意見が戻ってきた。この言葉は、セゼールにとってのネグリチュードが決して人種的なものでなく、「意識へのひとつの具体的到来」(10)を含意していたことと対応するものだろう。かつて最も苛酷な歴史的舞台となったところが、こうしてセゼール（および他の多くの者たち）を介し、今や最もアクチュアルな人間のありようを生み出しつつあるトポス（場）となっている。

こと、ゆっくりとだが、しかし確実に、文明の地殻変動は起こっているようである。

ところで、マルチニックに到着後間もなく、セルジュ・グーダン＝テビア氏に誘われて、島の南部にある海辺の町マランで開催される「フェスティバル・マラン・ヴィラージュ」のオープニング・シンポジウムに出かけた。パネリストは、日本でもよく知られるグリッサン、コンフィアン、フランケチエンヌ（ハイチの作家）の他にドミニカ、ハイチ、ジャマイカなどカリブ諸国の作家、詩人、研究者ら。会場はマランの文化会館で、中に入るとぎっしりの聴衆で凄い熱気である。若者や子供を連れた家族連れも多い。シンポジウムはフェスティヴァルのメインテーマに沿って、カリブ諸国における「一体性の中の多様性、多様性の中の一体性」を歴史的、文化論的に追究するものであった。中でもフランケチエンヌの発表は独り演劇の形で行なわれ、最後は何とパンツ一枚の姿になっての熱演で、会場の大喝采を浴びていた。このフェスティヴァルのオーガナイザーであるピエール＝ルイ氏によると、21世紀にはカリブ人が滅んでから500年後であるカリブ諸国は文化的、社会的、政治的統一体として再生するだろうとのこと、やはり新しい文明の胎動が始まっているようである。

マルチニックでのこうした文化活動の中心にいるのが、造形作家&詩人でパリでも活躍するグーダン＝テビアである。氏の厚意で上記フェスティヴァルのレセプション・パーティーにも参加することができ、マルチニックの画家、作家ら文化関連者を多く紹介してもらった。印象的だったのは、彼らが皆お互いに友人であること、そして実にフランクに暖かく歓迎をしてくれることだった。こうした友愛感はいわゆる先進地域のものとは多分に異なっていて、新鮮な体験であった。

仏領ギアナ人を父に、フランス本国とカタロニアの血を引く女性を母に持つグーダン＝テビアは、いわばクレオール的フランス人である。彼の住居兼アトリエは海を見渡す山の上であり、周りには熱帯系の樹木が鬱蒼と繁っている。そうした出自と生環境ゆえか、彼の造形作品はフランス的である以上に何かそこに宇宙的な生々しさが宿っているようだ。贈られた詩集から彼の詩の一節を引用してみよう。

おまえ
おまえ　そして地球なる大地
そもそもその胴回りを測ることはできないし
そこには悪がたっぷり孕まれている
その外観を証すこともできず
その球体の形を捏ね上げたのは空無
その起源についてあれこれ言うのも
その卵形はまさしく卵のような何かを有する
その肉の内部で　その界内で

地震が形造られているのを解することもできない

ならば大声で高く叫ぶがよい

おまえが知っているのは 知らないということだと(11)

詩集のタイトルは「惑星人間」。詩の中の「おまえ」とは、地球に宿る彼自身であり、われわれ人間であり、また地球そのものでもあるだろう。こうした人間と宇宙的との混声的響き、それはまた彼の魂の響きでもある。

ブラジルの方に移ろう。ダダ・シュルレアリスムという運動は、ひとつながりで一体的に展開した運動でありながら、ダダとシュルレアリスムはどこか異母兄弟のようなところがあって、どうもそれぞれを突き動かしていた精神スタンスは血筋的に異なっていたらしいのだが、大らかなる大地ブラジルでも、やはりこうした対立が存在していた。現在ロートレアモンの全作品のブラジルでのポルトガル語訳を進めているクロード・ウィレル氏は、いわばシュルレアリスム系であり、彼が同僚のフロリアーノ・マルティンス氏と出している雑誌『Aguilha』もその流れを汲む。氏はブルトンやアルトーらシュルレアリスム詩人の秘教的、神秘主義的傾向に関心があり、「シュルレアリスムとオカルティズム」というテーマで博士論文を準備しているという。

一方、オラシオ・コスタ氏によれば、シュルレアリスムはブラジルにはほとんど存在せず、ブラジル・モデルニズモに影響を与えたのは専らダダで、その代表がオズワルド・ジ・アンドラージ（以下オズワルドと略称）の「食人宣言」（1928年）であるという。「食人」の習慣すなわちカニバリズムは、ヨーロッパが「未開」地域を原住民の虐殺をも辞さず植民地化してゆく過程で、そうした野蛮なる風習を持つ邪教徒にキリスト教をもたらした文明化するのはわれらの任務であると正当化する際の論拠になったものであるが、現代において、大量破壊兵器あるいは独裁の解体を理由に、民主主義と人権をもたらすために行なわれる軍事的介入は正当であるとする論拠と全く同様であることに注意されたい（そうした論拠の背後に、かつては金銀などの資源の獲得があり、そして現在では石油の支配があるわけだ）、しかしヨーロッパ側の植民地的収奪の方がはるかにカニバリズムであることは言を待たない。オズワルドは、このヨーロッパ的カニバリズムを逆手に取り、かつてブラジル原住民が白人侵入者を「食して」戦う力を得ようとしたように（「食人」とはそうした一種の儀礼だった）、ヨーロッパ文化を肥沃なる大地ブラジルに飲み込んで文明形成の力学転換を図ろうとするのである。

確かに、ここには言うところの本質主義的な姿勢と二項対立的な思考は見られるものの、コスタが力説するように、今日の文化状況に照らしてみれば実に先駆的な試みだったと言えるだろう。この点については、ウィレルも、オズワルドは様々な見方があるにせよ、ブラジル・モデルニズモの宇宙であることは間違いないとのこと。サンパウロ大学構内にある現代美

術館には、オズワルドの妻で、彼の「食人宣言」をイメージ化する如くの黒人女性像を描いたタルシーラ・ド・アマラルの絵が何点かあり、その主任研究員のガブリエル・ボルバ氏とブラジル絵画をめぐって色々話をしたが、タルシーラの絵が最も先鋭だったのは、「食人宣言」時代のオズワルドと連れ添っていた時期だったという指摘が印象に残った。きっとオズワルドは周囲にも独自の波動を浸透させる巨星だったのだろう。

こうした文化交配の多種多様な層が数限りなく重なった土壌に咲いた巨大な花ブラジル。そうした花の遺伝子を自身も受けて生きてきたであろうコスタは、その中核部サンパウロそしてブラジルの特性として、コスモポリット、カトリコス、南半球性の3点を挙げた。コスモポリット（コスモポリタン）については説明は不要だろう。カトリコスとは、それを語源とする「カトリック」という宗教的な次元を含みつつ、かつそのギリシャ語の元来の意味である「全包含的な」という内容で使われている。つまり、人々はそこではひとつの「コミュニオン」（一体性）として混ざり合い結び合ってゆくという文化的実体性へと拡張して語られているわけである。氏は、それを、移住者が原住民と混ざらず別々のテリトリーで生きてきたプロテスタント的北アメリカ（アングロアメリカ）と対比させる。そこではしたがって文化はモザイク化せざるを得ない。氏のこうした考えに立てば、アメリカ流の多文化主義的思考は、その表われであると言えるだろう。3つ目の「南半球性」とは、ブラジルが、これまで文明をつくってきた北半球には属していないということ、つまりそこには起源はなく、すべてが新しく始まったというブラジルの異種混濁性を言い表したものとすること。これは、人に起源はなくアイデンティティーはそれを生み出すプロセスにほかならぬとするカリブ性とぴったり重なるものである。

こうして世界の各地域で文明の変動が始まっている今日、コスタによれば、今や世界に文化の中心地はなく、むしろ世界の至るところが文化の中心地になりつつあるのだという。かつて世界に君臨したヨーロッパの文化も今は「ひとつの文化」となっており、世界中がそれに気がつき始めているのだが、唯一そのことに無自覚なのがアメリカとすること、全く同感である。

2003年はアメリカのイラク進攻で明け暮れた年だったが、その戦争への関与をめぐって日本で繰り広げられた議論の中で特徴的だったことは、世界がかくも文明的な変動を遂げつつあるにもかかわらず、ここ日本では政治的にも文化論的にも新しいシナリオが全く描けず、視野が一国的にのみ、そして対米関係にのみに自閉化してしまうことだった。この国もまた、近代の欧米の世界的覇権のもとで開国し、その過程で独自の文化異種混濁の経験をしてきたがゆえに、それなりの文明論的地図もそろそろ有していいとしかるべきであるにもかかわらず。ひとつ言えることは、冷戦体制の崩壊をによって、脱亜入欧をもって始まった日本の近代の構造もまた根本から変容し、今や全く新しい局面に入っているということである。

であれば、もはや日本とは何か、日本人とは何かを、起源的に、自閉的に問うのではなく、ユーラシアの東端および太平洋の西端に位置し、東洋にも西洋にも属すこの国が（そしてわれわれが）今後「どのような存在となってゆくべきか」が思考の方向軸となるべきだろう。そうした視軸に立って考えるならば、カリブやブラジルでの歴史的文化的体験は、確かにわれわれとは直接には結びついていないにせよ、基底部では必ずや繋がっている（あるいは繋がってゆく）はずである。

最後になるが、今回のマルチニック訪問にあたっては、札幌国際大学のブリュノー・デュボワ氏に、セルジュ・グーダン＝テビア氏を紹介していただいたことが大変に大きな力となった。誌面を借りて厚くお礼を申し上げます。

（注）

(1) J.ベルナベ、P.シャモワゾー、R.コンフィアン『クレオール礼賛』恒川邦夫訳（平凡社、1997年）25頁。

(2) ジェームズ・クリフォード『文化の窮状 二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信ほか訳（人文書院、2003年）224頁。

(3) パウ・ブラジルはポルトガル語。pauは木、brasilは、この木が赤いことから、braseiro（「真っ赤に燃えた炭、火鉢」のこと）がなまって出来た言葉らしい。

(4) 原著は1941年刊。邦訳、ツヴァイク『未来の国ブラジル』宮岡成次訳（河出書房新社、1993年）

(5) Maria de Lourdes Teodoro : *Modernisme Brésilien et Négritude Antillaise*---Mário de Andrade et Aimé Césaire. L'Harmattan, Paris, 1999. なお、マリオ・ジ・アンドラーヂはオズワルド・ジ・アンドラーヂと並ぶブラジル・モダニズムの中心的作家（両者に血縁関係はない）。特異な小説『マクナイーマ』で有名。

(6) P.シャモワゾー、R.コンフィアン『クレオールとは何か』西谷修訳（平凡社、1995年）182頁。

(7) 詩集『アルコール』の冒頭におかれた詩篇「地帯」の最終行。

(8) 『地獄の季節』、「悪胤」より。

(9) Annie Le Brun : *Pour Aimé Césaire*, Jean-Michel Place, 1994, p.55. および、Annie Le Brun : *Statue Cou Coupé*, Jean-Michel Place, 1996, p.34.

(10) クリフォードのセゼール論「新語のポリテイクス」に引用。ジェームズ・クリフォード『文化の窮状 二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信ほか訳（人文書院、2003年）230頁。

(11) Serge Goudin-Thébia : *L'Homme Planète, Fractal System & Design* (Caracas), 1991, [p.3].